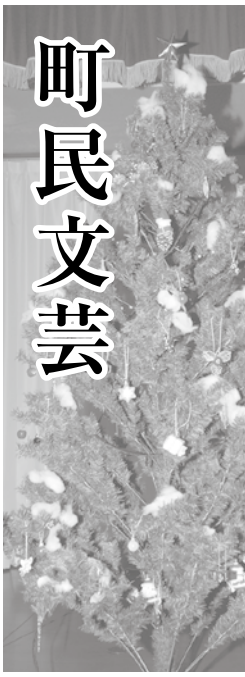

町民文芸

只見短歌会

十月詠草

大塚栄一　指導

夕明り残れる畑に大根引く人は影絵の如くに動く　小倉キミ子

災害で途絶えし列車の再開日思ひめぐりて我も乗り来し　関谷登美子

病みつぎて楽しむ暇もなく逝きし甥の寠れし頬擦りつぐ　五十嵐夏美

猛暑にて山の木の実も不足らし熊の出没放送続く　渡部ゆき子

弱き身に看取りし義兄も遂に逝き火葬場への道は紅葉深し　古川　英子

僅かなる実りなれども娘らに送る楽しみありて続けぬ　馬場　八智

借りるよと独りごと言ひ晴れし日の空家の庭に蕎麦を広げる　目黒　富子

えごま干す夫は群がる雀らを追ふこと頼み外に出でゆく　渡部ヨリ子

頂きし赤きカトレア卓上の真中(まなか)に置きて夕餉賑ふ　新国　洋子

（出　詠　順）

只見俳句会

十一月例会

目黒十一　指導

カシラーナカ秋季検閲声高く　一穂

吹奏楽山の色付き裾野まで　アツ子

紅葉の目薬の木や名主跡　礼

古里はダム湖となりぬ朴落葉　邦夫

紅萩の実もつらなりて切り通し　信

減水の山肌寒し田子倉湖　一灯

横書きの出来ない男実南天　邦男

灯下親しちびた鉛筆捨てがたく　隆堂

道の辺の馬頭観音銀杏散る　藤彦

水涸るる村の外れの六地蔵　恒夫

身に入むや水につながるもの多し　吉児

鷹渡る越後境の明けの空　チアガール笑顔弾ける秋の空　又壱歩

大根が右往左往す堀の中　懐かしき友と語れば小鳥来る　康女

晴天の銀杏の枝天を刺し　茅刈りの見え隠れする夫の笠　笑羊

観音の在す岩屋や渓紅葉　家人なき軒に匂うや花八ツ手　洋子

吊橋を渡る杖音十一月　秋麗たしかに老いてゆく身かな　リウコ

父の忌やボジョレヌーボー献じけり　紅葉山茅葺き屋根のそば処　都

腰病むや閨に差し入る冬の月　人形の髭のゆるみに残る蝿

綿虫や景品積みし展示場

熊除けの鈴鳴らしつつ登校す

大根の太くて抜けぬ入日かな

秋の日や家路へ急ぐ峠道

野山にも町明かりにも秋時雨

三度目の谷間の雪のしきりなり

迎うるも送るも清し花八ツ手